真宗大谷派高岡教区教化通信

我身

WAGAMI

創刊号
2019年3月1日

題字：常如版の御文

護法の言をなす勿れ

高岡教区教化本部長
太田浩史

王政復古・富国強兵の道をめざせる維新日本において、寺院と僧侶は「天下の閑地・遊民」とみなされ、富山藩では数百の真宗寺院を一院に合併する前代未聞の合寺令が敷かれた。藩兵が取り囲んで寺に大砲を向け、「抵抗するものは打ち殺す」と宣して仏像を射撃したのである。このような悲況下、東京芝の増上寺では本尊仏具が撤去され、内陣に並べられた鏡に向かい各派管長が祝詞をあげさせられるという大教院神祇の奇態を現出した。いっぽう解禁されたキリスト教は欧化の風潮に乗じて忽ち教線を拡げ、科学万能主義のもと仏教は封建の弊習と罵られ、各宗なすすべもなく逼塞する中、東西本願寺のみは法嗣以下賢才を洋行せしめ、大学その他教育施設を創設し、被災地を救恤し、教誨師を養成するなど、決然積極策に打って出たのである。

本派島地黙雷の真宗界に宛てた書簡に当時の気概がよく顕れている。「兄の為に一言を報ず。護法の言をなす勿れ。弘教の念を以て之に換へ、伝布の行を以て従事せらるべし。護るは跡を追ふのみ不能進化也。外教日に行はる。若し護らんとせば日に縮る。若し弘教せんとせば豈啻本邦内のみならんや。エゾは勿論、満州、蒙古、朝鮮、支那等、近きより遠きに及ぼして、宇内に瀰漫せしめて始めて満足し、衆人を皆信ぜしめて則ち足る。於是乎、各国の語、天下の事、皆知らざるべからず、力めざるべからず。上、天子より、外、異人よりして皆信を取らざるを得ず。本邦の人一人此に注意するなし、護法の言は云べからざる也」。

黙雷の獅子吼に触れるや、大谷派は直ちに呼応し、高田・木辺派また立ち上がり、忽ちに大教院の魔窟を転覆せしめ、国家を邪教の自家中毒から救ったのは一人真宗である。哀れ未熟にして尊大なる吾が国家よ、回心懺悔して正法を崇めよ。

しかるに現今いわゆる教団の危機なるものは何ぞや。別段禁令もなく、銃弾も飛ばず、打ち壊しも、辱めもなく、ただ寺に人が来ぬことのみ怖れて「愛山護法」を囀るのみ。「外教日に行はる。若し護らんとせば日に縮る」。黙雷予言せる如く、弘教の念を護法に回し、伝布の力を伽藍の華美に注いで、果して獲るものは何ぞ。ただ一握の砂に非ざるや。

明治の先覚に比して吾等に不足するは教化力である。窮鼠猫を噛む弘教の執念である。無縁の生死海に身を投じる至誠である。世の悲しみを前にしてみなぎる熱血である。兄の為に一言を報ず。一端の恩愛に縛着して護法の言をなす勿れ。

高岡教区教化委員会　公開研修会

真宗門徒の姿勢を学ぶ

～新宗教を縁として～

二〇一七年四月十三日　於　高岡教務所

講師　京都教区玄照寺住職　瓜生　崇　氏

一九六二年（昭和三十七年）の同朋会運動発足の背景の一つとして、新宗教が台頭してきたということがあったと言われています。当時から今日まで、この問題に取り組むことによって真宗門徒としてのわが身の姿勢が問われていることに気付いていたでしょうか。近年寺院の弱体化（参詣者の減少、後継者不在、新宗教の台頭など）が叫ばれる中で、新宗教の台頭という現状を学ぶことをとおして、改めて私たちの課題について確かめていきたいと思います。

（開催趣旨より抜粋）

このような開催趣旨のもと、大学在学中から十二年間、浄土真宗親鸞会に入会されていた経験をもつ瓜生崇氏から、自身の体験に基づいた親鸞会の活動現状を中心にお話しいただきました。

今回、その講義全文を掲載いたします。

■はじめに

皆さんこんにちは。今ご紹介いただきました瓜生と申します。元「親鸞会」です。十二年間親鸞会にいました。そして親鸞会をやめてからようやく十二年が経ちました。もう十二年経ったのでそろそろ「元親鸞会」という看板を外してもいいような気もするんですけれども、こういうところに呼ばれて話をする機会がまだまだあるものですから、いまだにずっと「元親鸞会の瓜生」です。この間、ある本願寺派（お西）の別院でお話をしました時に、「浄土真宗親鸞会の瓜生先生」と紹介されまして、ちょっと困りました。

親鸞会の本部は今、射水市にあります。それは皆さんご承知のことだと思いますけれども、もともとは高岡に本部がありまして、今そこは親鸞会の高岡会館という施設になっています。私はそこに大体五年間ぐらい住んでおりました。ですから、あの高岡会館でずっとお説教をしていました。高岡にイオンができてからちょっと経ったぐらいの時に親鸞会をやめているんです。その後、本願寺派の高岡会館でもお話をさせてもらいました。そしてこの大谷派（お東）の教務所でもお話をさせていただいております。今日で二回目です。親鸞会とお西の高岡会館とお東の教務所、高岡でこの三つを制覇したのは多

【講師プロフィール】
1974年生まれ。
電気通信大学在学中の1993年に浄土真宗親鸞会に入会。1998年より同会の専従の講師として布教やインターネット対策にかかわり、2005年に脱会。その後は自身の体験を元に講演活動や大学でのカルト対策、脱退者へのサポートを通じて問題に関わってきた。
真宗大谷派玄照寺住職（滋賀県東近江市）。日本脱カルト協会理事。猫好き。

分僕だけだと思うんですね。

今日は親鸞会を中心にお話をいたします。それから、『さよなら親鸞会』という本がありますが、これは私の親鸞会での体験談なんですけれども、その増補版が出ていまして、体験談のあとに「親鸞会Q&A」というのを作りました。僕もいろんなところの研修会で親鸞会の話をしてきましたけれども、どこでも似たようなことを聞かれるんです。それについての答えをかなりのページ数を割いて作ったものを出しました。もしよかったら買ってください。「親鸞会っていうのは浄土真宗なんですか？」とか「親鸞会はカルトですか？」とか、そういうよくある質問への答えを整理して載せています。

■忘れ去られるカルト事件の事実

僕はもう十一年もカルトの問題に携わっているんですけれども、今、実は一番多い相談が親鸞会ではなくなりました。親鸞会の相談は、かつては多かったんですけれども、今は年間数件もありません。では、一番多いのはどこかというと、「オウム真理教（しんりきょう）」なんです。正確には今はオウムという教団はありませんので、その後継団体である「アレフ」です。なぜ今アレフに入る人がたくさんいるのか、ちょっと信じられないでしょう。一体何に魅力を感じて、どうして入るのかと思いますよね。

これはいくつか理由があるんですけれども、まず年月が関係しています。地下鉄サリン事件が起きたのは一九九五年です。今大学に入ってくる人は、ほぼこの事件の後に生まれた人なんです。大学で、オウム真理教を知っていますかと話をしても、知っている人は次第に減っています。

ある女性が、ヨガのサークルに行きまして、ヨガで体の調子がすごく良くなり、人間関係の悩みも消えていった。入会しませんかと誘われて、これはすばらしいと「しますします」と入会用紙を書こうとした。そしたら、その入会用紙の一番上にアレフと書いてあった。「アレフってどっかで聞いた団体だな」と思いながらも名前を書いて入会した。それで、頭の中でアレフという言葉が非常に気になって、大学のゼミの先生に、「アレフって聞いたことありますか」と聞いたら、その先生は「オウム真理教だけど」「オウム真理教って何ですか」というと、地下鉄サリン事件をやった団体だということを聞いて、私のところにすぐ通報がありました。私はその女性を車に乗せてアレフの拠点まで行きまして脱会の手続きをしましたが、そんなことがちょくちょくあるのです。

そもそも、今アレフの中に入っている人が、地下鉄サリン事件のことを知っているかといえば、当然知っているんです。知っているんだけれども、入信している。なぜそういうことになるかというと、あれは陰謀で、私たちは地下鉄サリン事件なんか起こしていないと思っているんです。なぜそんなふうに思えるんですかというと、思えます。だって、あの南京事件もなかったと思っている人は、いっぱいいるんです。南京虐殺なんてなかったと書いてある現代史の本が実際にあるわけです。今南京事件というのをちゃんと研究した学者で、南京事件がなかったと言っている人は一人もいないです。被害の大小という意味ではいろんな意見があります。三

十万人が亡くなられたという主張もあれば、そうではないという主張もある。それについてはいろいろ意見があるけれども、なかったという学者は一人もいないんです。なのになぜなかったと言い切るのがまかり通っているかというと、なかったという証拠だけを集めたら、そう思わせることは十分できるからです。

同じようにオウムの事件も、関与がなかったという証拠だけを集めたら、なかったと思わせることはできるんです。だから今アレフに入っている人は自分たちはやってないと思っています。

■カルトの特徴は二重構造　ゆで卵の白身と黄身

親鸞会にも通じることなんですけれども、オウム真理教の一連の事件に関わった人たちは何人ぐらいだと思われますか。起訴された人が一九二名、つまり二百人ぐらいなんです。では、事件当時のオウムの信者は何人いたと思いますか。一万五千人というデータもあります。サリン事件の後に公安調査庁が観察処分を始めてから、最初のデータでも一万一千人となっています。つまり一万人余りの信者の中で、サリン事件に関わったのは二百人なんです。ということは、ほとんどのオウム信者にとっては、あの事件は寝耳に水なんです。

カルトというのは必ず二重構造になっています。ゆで卵のようなものです。ゆで卵というのは外身が白身になっていまして中身が黄身になっていますね。これがいわゆるカルトというものです。オウムで言ったならば地下鉄サリン事件とか、信者の殺害事件とか、サリンの製造とか、そういうことに関わった人というのは黄身の部分です。これが二百人です。そしてそれに全く関わりなしに真面目にヨガの修行をしていた人がほとんどです。これらの人は自分たちの教団がこういう事件を起こしたということをいまだに信じられません。アレフの信者さんには私と同じ歳くらいの人も結構いらっしゃるわけです。四十代、五十代ぐらいの人がいる。四十代、五十代ぐらいの信者さんの中には、事件が起きた時にオウムの信者だった人もいる。事件が起きた時にオウムにいたのに、なぜ認められないんだと普通は思うんです。しかしそれは逆でしてね、こういう事件が起きた時にオウムにいたからこそ認められないんです。なぜかというと、これらの事件の起きた時に、彼らはただ真面目にいろんなところでヨガの修行をしていただけだからです。まさかこんな事件が起きているなんて全然知らなかった。オウムの中にいたにもかかわらず、全く私たちは知らなかったんだから、こんな事件を起こしたはずはないと思っているんです。

オウムは「不殺生戒」を守っている教団でした。だから当時のいろんな宗教学者さんなどが、オウムは本物の仏教だと言ったわけでしょう。僕等は「殺すなかれ、殺さしむなかれ」とか話をするんだけれども、それが終わったら飲み屋に行って唐揚げを食べるでしょう。オウムの信者はどうかというと、ゴキブリもハエも殺さなかったわけです。だから道場にはゴキブリとかハエがたくさんいた。食べるのはオウム食という根菜とかバナナです。

そういう指導を受けてきた人たちが、こんな事件を起こしたというふうに見せつけられても、どうやっても受け入れることができないんです。これがカルトの特徴なんです。カルトの最もカルト的なところに関わっている人というのは、教団の中でも一部であるということなんです。親鸞会だったらもっとそうです。「親鸞会は非常に問題のある教団なんです」。それはみんな言います。僕もそう思います。いましたから。でも親鸞会の問題性というところに関わっている人は親鸞会でもごく一部です。僕なんかは、その問題性に直接関わっていたところにいたわけです。だから、私がいたのは卵の黄身の部分なんです。

では、皆さんのご門徒さんで親鸞会に関わる人はどうでしょう。のめり込んでいく人もいるかもしれないけれども、ほとんどの人の関わり

方は白身の部分でしょう。もっと仏教の話を聞きたい、お寺の同朋会などが月一回では物足りない、そう思っている人は、親鸞聖人のお話というチラシが自分の家のポストに入っていたら、なんだろうと思って聞きに行く。聞きに行って、そして一回五百円ぐらい払ってお話を聞く。月に一回か二回ぐらいそういう親鸞会の勉強会に出て、一応入会もして月三千円の会費を払って年に数回射水の本部に行く。これのどこがカルトですか。しかもお寺との関係がなくなったわけではない。葬儀とかがあったらお手次ぎのお寺にお願いするわけでしょう。法事なんかも普通にお寺に頼んでするわけでしょう。だから皆さんが月参りに行かれたらお内仏の横に高森顕徹さんの本が置いてあったりするわけです。

こういう関わり方をしている親鸞会の人だけならカルトなわけはないんです。たぶんお寺に払っているお金の方がよほど大きいと思います。親鸞会に払っているお金は、せいぜい月に五千円とか、一万円もいかないんではないですか。親鸞会というのは、そういう関わり方をしている人が大部分です。今、親鸞会の会員は推定すると大体一万人ぐらいです。少ないですね。その中の七割くらいはそんなもんです。親鸞会の問題のある部分に関わっている人はほんの一部です。一部の事例をもってきて、この浅い関わり方をしている人たちに「親鸞会は危ないんだよ」という話をしても通じません。「何千万円も御布施しとる人おるんやで」「全ての財産を譲渡するっていう契約をした人もいるんやで」、これは事実です。でもそういう人は少数です。「そんなこと言われても月三千円以外は取られたことないんやけどな」と、聞いた人は思うでしょう。

そしてそういう人が、親鸞会に行った時に「この前、住職さんから、親鸞会に行ったら身ぐるみはがされるとか、そういう話を聞いたんやけど、ほんまやろか」「へえ、身ぐるみ剥がされましたか」「いや、月に三千円しか払っとらんな」「そうでしょう。あれはね、住職さんが自分とこの門徒さんを取られるのが嫌で、あることないこと吹き込んでるんですよ」「やっぱりそうか。今度うちのお寺が屋根の改修をするというので、寄付してくれと回ってきてるけども、あんなんもあるしな」とか、そうやって結局お寺から心が離れていって、親鸞会の中にどっぷり浸かっている人が後を絶たないわけです。

ここは起きていることを正確に見ていかなければならないわけです。僕等はどうしても大げさに見がちですよね。でも、それでは物事の本筋というのは見えてきません。どんなカルトにおいてもこの白身の部分と黄身の部分があると思ってください。親鸞会などは白身の部分が比較的分厚い教団です。普通に親鸞会に関わっている人が、例えば「天理教」とか「立正佼成会」とか「生長の家」とかそういうところに行っているような人と、そう大して変わりがあるかというとほとんど変わりはありません。では、親鸞会に行くことを止めなくてもいいんですか、別にほっておいてもいいんですか、そういう理屈にはならないんです。なぜならこの白身の部分から黄身に入っていく人が確実にいるからです。そういう人がいる限りは、親鸞会というものを警告していかなければならないんです。でも、こういう人たちがほとんどだという事実を知らないままで、住職さんが黄身の部分ばかりを言ってしまったならば、心は離れていきますよね。

■そもそもカルトの定義とは一体何か

さて、いつも話していることですが、一般的にカルトとは何かという話です。「代表者または特定の主義主張に絶対的に服従させるべく、メンバーないしメンバー候補者の思考能力を停止、あるいは著しく減退させて、目的のためには違法行為も辞さない集団」とあります。この中で具体的に何が問題なのかというと、「目的のためには違法行為も辞さない集団である」。ここなんです。その団体の目的を達するためにメンバーの思考能力を停止させたり減退させる

ということは、はっきり言ってしまえば程度問題であって、どこの宗教でも大なり小なりやっていることです。大谷派の教師修練もそうです。

いや、これそうなんですよ。「思考能力を減退なんてさせていません」とか言うかもしれませんが、やはりみんなと同じところに泊まって一週間過ごして、そして厳しい規律の中で物事を進めていくのは、同調圧力によって集団に一様の信念を植え付け、「これは変じゃないか」と考える力を失わせているんです。軍隊でも同じことをやりますよね。合宿というのは宗教にとって物すごく大事です。要は環境を途絶して周りと容易にはコンタクトを取れないようにして、一方的に考える材料をこちらから提供できるわけでしょう。勿論カルトがやっているような手法と大谷派がやっている手法とは洗練さや程度に圧倒的な差があります。どちらが洗練されていて徹底的なのかは言うまでもないですね。カルトです。それがカルトの手法のカルト的である所以です。

大谷派はやはり泥臭い。スタッフ同士で喧嘩したり、足並みが揃っていない。修練にしてもわずか一週間で終わってしまいます。カルトはそうではないわけです。一つの目的に対して徹底的に情報をコントロールして、集中的に同調させていきます。「いや思考能力を停止とか減退させてない。私たちはね、課題を与えて考えさせてるんだ」とか言うではないですか。でも、はっきり言ってしまえば、携帯電話も取り上げて一か所に集めて一緒に合宿をさせて、そして厳しい規律の中でいろんなものを制限して講義をずっと聞かせるのは、まさにそれです。感想を書かせたり、座談なんかで自分の発言をさせますでしょう。あれもマインドコントロールでは超有力な手段なんです。あれをやり続けると、自分の正直な気持ちではなく、その集団に評価されるような発言をするようになる。そして発言することによって、自分の発したその言葉によって、自分が縛られていくんです。最初はちょっと集団に忖度したつもりが、いつの間にか自分の本当の気持ちになるわけです。

では、我々とカルトは何が違うのかというと、「目的のためなら違法行為も辞さない集団」であるかどうか。これなんですよ。これをやるかどうかなんです。要はカルトの特徴とは何かというと、私たちが今まで大事にしてきた人権とか善悪の判断基準とか、そういうものをカルトの信念が軽々と越えていくかどうかということなんです。

例えば「ＩＳ（イスラミックステート）」、イスラム国がありますでしょう。イスラム国を私たちはカルトだと言ったりするわけですが、なぜカルトだと言えるかというと、人を殺してはならないとか人権を大事にしなければならないとか、長い歴史の中で培われてきた世界共通の価値観があります。そういう価値観をイスラム国はその目的達成のためには破壊して越えていきますでしょう。

これは、オウムの地下鉄サリン事件もそうです。事件が起こった後にこう言った信者がいたそうです。「自分のお父さんお母さんがあの地

カルトとは

- 代表者または特定の主義主張に絶対的に服従させるべく、メンバーないしメンバー候補者の思考能力を停止、あるいは著しく減退させて、目的のためには違法行為も辞さない集団→破壊的カルト
- その集団が個人の自由と尊厳を侵害し、社会的に重大な弊害をもたらしているかどうかで判断されるべきであり、その集団の教義や儀礼が奇異に見えるかどうかであってはならない。

当日の講師スライド資料より

下鉄に乗っていればよかった」。そんな馬鹿なと思うではないですか。なぜお父さんお母さんが地下鉄に乗っていればよかったんだと。

その信者はお父さんお母さんに自分がオウムに入っていることを反対されていたんです。オウムに入っていることを反対するということは、オウムの教義でいうと来世に三悪道に堕ちるんです。地獄・餓鬼・畜生に堕ちてしまうんです。その信者は、親思いだったので、自分のお父さんお母さんが地獄に堕ちることをどうしても認めることができなかった。何とかお父さんお母さんを救いたいと思ったんです。でもどれだけ話してもオウムに帰依してくれない。「どうしたら、どうしたら」。その時に自分たちの教団が地下鉄サリン事件を起こしたというニュースが飛び交ったんです。それを見た時に、「あの地下鉄にお父さんお母さんが乗っていれば、お父さんお母さんはポアされて、天上界に生まれ変わることができた。あの地下鉄に乗ってれば救えたのに」と嘆き悔しんだというんです。

これを狂っていると思うか、どう思うか、いろんな人がいると思うんですけれども。ここで問題になるのは、なぜオウム真理教の信者が地下鉄で人を殺せたかというと、これは人を助けるためだと思っていたからなんです。わかりますか。イスラム国もそうでしょう。我々の先達もそうでしょう。一向一揆、「進者往生極楽、退者無間地獄」なんてむしろ旗を立てて、戦国の軍勢に突っ込んでいった先達がいるわけです。彼らはなぜ槍を持って人殺しをしたのかというと、人を救うためでしょう。戦時中に私たちの教団が戦時協力したのもそうでしょう。あれも別に、銃を突きつけられて、やれと言われてやったのではない。多くの方は喜んでやったわけです。アジアの平和のために、アジアに仏法を伝えるために、喜んで戦争に協力をして布教使をどんどん派遣し、占領したところに親鸞聖人の教えを伝えてみんなを助けるんだとやったわけでしょう。

そういうことをお話ししたら、「それは時代によってかなり価値観が違うんではないですか」と意見が出てくると思います。そうなんです。昔の一向一揆をカルトと言っていいかというと、それはちょっと無理があります。現代の価値観、今の私たちの人権の問題はどんどん変わっていくものです。これからも多分変わっていくと思います。しかし共通して、その時代の社会の規範よりも教義的な信念をはるかに優先していったならば、言葉は違っても「カルト的」に見られていくということはあるでしょう。

ひょっとしたら、敵が攻めてきて一致団結して戦争して国を防いでいかなければならない、なんて時が来た時に、社会からの価値観の流入を拒絶して信者を一つの信念で染め抜いて、戦争に命懸けで反対するような教団が現れたら、それはカルトと見られるかもしれません。これは難しい問題ですよね。今日はお坊さんが多いので、こういう話をしてもわかってもらえるかと思ってそういう話をしています。

■教義や儀礼ではカルトと判別できない

そして「その集団が個人の自由と尊厳を侵害し、社会的に重大な弊害をもたらしているかどうかで判断されるべきであり、その集団の教義や儀礼が奇異に見えるかどうかであってはならない」。教団の教義とか教団の儀式というものでカルトかどうかということを判断できないということです。

今一番話題になっている新宗教教団というのは「幸福の科学」と言われるところです。あの清水富美加という方が出家したことで一躍有名になりました。この間、本屋さんに行ったら、釈徹宗さんの本の横に、マハトマ・ガンジーの本がズラッと置いてあったんです。「えーっ」と思ってマハトマ・ガンジーの本を取ったらマハトマ・ガンジーの守護霊が書いた本だった。幸福の科学出版。そういう本が山のようにあるんです。

親鸞聖人の守護霊が書いた本もあるんです。親鸞聖人の守護霊が大川隆法に乗り移って、大川隆法が書いた親鸞聖人の本です。親鸞聖人は

「弟子一人も持たず」と言われたと『歎異抄』にありますが、その本には「弟子が一人もいなくて本当に寂しかった」と親鸞聖人に霊言として言わせているんです。「何だ、これは」と思って読んでいました。そういうのを見ると、あんなデタラメなことを言っているのはカルトだと僕等は思いたいのですけれども、そこだけで判断は出来ませんということです。

その教義がデタラメかどうかということは、カルトかどうかの判断基準にはなりません。では、何が影響してくるのかというと、その集団の中でその信者の自由と尊厳が侵害されているかどうか。社会的に重大な弊害をもたらしているかどうか。この二点です。

■伝統教団の持つカルト性

このことから、一つのことが見えてきます。皆さんはカルトの問題というのは新宗教の問題だと思っています。新宗教という一つのくくりがあって、その中にカルト問題があるように思うんです。これは大きな誤解です。伝統宗教の中にもカルト問題は厳然としてあります。例えばキリスト教で言うと、神父さんとか牧師さんが教会の若い男女に対して、宗教的権威を持って性的な関係を強要する。そういう事件はたくさんあるんです。

ならば私たち伝統仏教教団にはないんですかと言ったら、やはりあります。一番私たちに関係してくるのは霊感商法です。「私、ずっと最近辛いこととか苦しいことばっかりが身の上に起きてくるんですけども、何か変なものが憑り付いてるんじゃないでしょうか」と皆さんのお寺にもそういう人が来ませんか。それを供養してほしいと。そういう人に対して、「あなたは何代前にこうやって苦しんで死んでいった人の霊障があるから、今こうやって苦しんでる。だから、これを買ってこういう祈願をしたならば良くなりますよ」と言って、プラスチックの仏像を何百万円で買わせたりとか、高額なお布施をとって祈祷を受けさせたりとか、そういうお寺は伝統教団の中にもあるんです。

だから、カルトの問題というのは伝統宗教にもあるんです。伝統宗教と新宗教の両方にあるんですが、伝統宗教の方が信者さんがはるかに多いわけですから、実はカルトの被害ということを言ったならば、伝統宗教の方が多いかもしれないんですよ。ただ、伝統宗教の場合は教団そのものがカルト化する可能性は低いでしょう。あくまで、末端の教会や寺院の問題であると思います。

■カルト教団の六つの特徴

次は具体的なカルトの問題性についてです。一つ目は「正体を隠した勧誘」。どうですか皆さん、「オウム真理教に入って一緒にサリンを撒きませんか？」と言われて誰が入りますか。何をやっているかということがわかって入る人がほとんどいないのがカルトです。逆に言えば、内実がわかったら絶対に入らない教団がカルトですね。ですから、自分たちがどういう団体であるかということを徹頭徹尾隠していきます。しかし、これには程度問題がありまして、例えば、「顕正会（けんしょうかい）」という教団があります。こういうところは自分たちのことをあまり隠しません。今僕はずっと顕正会の勧誘を受け続けているんですけれども、今度一緒に顕正会の会館に行って、ビデオを見ようと約束しています。彼らは最初から顕正会であると言ってきました。「念仏したら地獄に堕ちますよ」と僕のことを心から心配してくれる優しい人たちです。でも、そういうところは例外で多くは正体を隠してきます。

二つ目は「不安を煽る教え込み」。安心を与えるのではなく不安を煽ります。

三つ目には「法外な献金や資産提供の要求」、お金がかかるということです。四つ目には、「指導者への絶対服従」があります。それから五つ目には、「信者への精神的、性的虐待」。これらは実は対称的なものでして、献金とか資産提供の要求はだいたい年配層に対して行われます。これはわかりますでしょう。大学生などの

若い信者に対して、「一千万円払え」とか言われても無理です。持っているわけがありません。では、若者には何かというと、指導者への絶対服従とか信者の精神的・性的虐待となっていくわけです。つまり、若者というのは人生そのものを取られるんです。これがキーワードです。「カルトで奪い取られるもの。お年寄りはお金、若者は人生」。

カルトの何が問題か

- 正体を隠した勧誘
- 不安を煽る教え込み
- 法外な献金や資産提供の要求
- 指導者への絶対服従
- 信者への精神的、性的虐待
- 脱会する自由を認めない

（櫻井2012）

当日の講師スライド資料より

カルトの金銭被害は六十代、七十代に多いのです。その年代の人が一番お金を持っているからなんですが、他にも会社を辞めたりとかして、人生の転機だからという理由もあります。人生の転機が一番そういうところに入りやすいんです。お寺に来る人でもそうでしょう。三十代、四十代はなかなか来ないです。六十代になって、今まで一生懸命に仕事をして、一生懸命にお金を稼いで、頑張ってきた会社を定年退職するわけでしょう。そうなった時に、「俺は今まで頑張ってきたけど、これから何を頑張ればいいんだ」となってしまうんです。そういう時に入りやすいんです。女の人だったら四十代後半から五十代前半くらい。やはり子育てが一段落するからです。今まで子どもを育てるのに必死になってやっていた人が、子どもが就職したり大学に行ったりして手が離れて、私はこれから一体何を目的にして生きていけばいいんだとなった時に入っていくんです。カルトに入るタイミングで多いのは人生の転機なんです。

では、若い人がなぜカルトに入るんですかというと、例えば大学に入る時、大学受験の勉強を一生懸命にやって何とか合格したとなったら、合格することで自分が一生懸命に頑張ってきたものを奪い去られてしまうんです。その時に、「俺はこれから一体何をやって生きていけばいいんだ」となった時に、入っていくんです。

最後、六つ目に「脱会する自由を認めない」というのもあります。

■親鸞会の成り立ち

さて、カルトの一般論はこのくらいにしておいて、浄土真宗親鸞会のお話に入ります。この親鸞会という教団が発足したのは一九五八年です。この時はちょうど「統一教会（とういつきょうかい）」とか、「世界真光文明教団（せかいまひかりぶんめいきょうだん）」とか、こういう新宗教がたくさん生まれた時期なんです。「神々のラッシュアワー」という表現をした人もいました。今、日本に浸透している新宗教の多くがこの時代に教団の基盤を成立させました。「創価学会（そうかがっかい）」もそうです。創価学会が成立したのはもっと昔ですけれども、教団としての体を成して教勢を広めていったのはこの時代です。その時にちょうど親鸞会も発足していますけれども、最初は親鸞会というのはそんな大層なところではありませんでした。

親鸞会の会長である高森顕徹さんはもともと本願寺派のお寺の次男でしたが、最初に作ったのは「徹信会」という団体でした。これは元々宗教団体ではなかったんです。いわゆる門信徒団体とでも言いますか、聞法団体みたいなものです。そんなのは今でもいっぱいあります。○○学舎とか○○会とかあるでしょう。その程度

のものです。それで高岡の前田町の一角に小さな会館を建てます。平屋の小さい一戸建てですよ。高森さんが会館に来て、月に何回か法話をするわけですけれども、当時は他にもいろんなお寺でお話をしていたわけですからね。一人の布教使を中心としたファンクラブみたいなものでしょうかね。

富山のお寺で、報恩講とか永代経とかでお話しさせてもらった時に、昭和三十年代とかの古い法縁録があると思わず見てみるんですけれども、たまに「高森顕徹」と書いてあったりします。あるお寺で法話をした際、終わって帰る時です。そこの住職さんに呼ばれました。「お客僧さん、ちょっと」「はあ、何ですか」「お客僧、あんた、親鸞会におったそうやな」「ええっ、なんでわかられましたか」「まあ、あんたの話聞いたら懐かしゅうなったわ」「懐かしゅうなった、ですか」「いやね、あんたね、高森顕徹さんのお弟子さんやろ」「いえ、違うんですけど今は。昔はそうやったかもしれませんけど今は違うんですけど」「そんなこと別に『今は違う』なんて言わんでいい。高森さんがこのお寺に来た時が一番お参りが多かったんや」「はあ、そうですか」「あれね、本堂拡張して外にも全部畳とか敷いとるやろ、あれいつやったか知っとるか」「いつですかね」「高森さんが来た時や。高森さんが来た時はこのお寺がね、障子も襖も全部外しても入れんぐらい人が来たんや」「はあ、そうですか」「だから、お前な、高森さんの弟子やいうことをな、別にそんな隠す必要ないぞ」。その方は、もう結構なお歳の方ですから、高森さんと同じぐらいの年代を生きた人です。それで、その時に、お寺で高森さんを呼んだらお寺の本堂が満杯になったという話を聞いて、「ああ、何だかなあ」と思って僕は出て行ったものです。人気があったのでしょうね。

富山に来て高森さんの話をしたら、結構懐かしく高森さんのことを語る人は多いんです。特に本願寺派はそうなんです。この間、本願寺派富山別院で、親鸞会の話をしてほしいということで行きました。そしたら八十過ぎくらいのご住職さんが来られていまして、実際に会ったとか自分のお寺で話を聞いたという人もちらほらおられました。それで、「あの人を本願寺派から追い出したのは間違いやった。あのぐらいの間違いだったら我々の教団が正せたはずなんだ。何で追い出してしまったんや」ということを今になって言われるんですね。

高森さんは一九七〇年に僧籍を剥奪されます。これはなぜ剥奪されたのかというと、そこにはいろんな原因があって、昔これに関わったような人に何人か聞いたんですけれども、意見は二つに分かれます。一つは高森さん自身が僧籍を返上したという意見です。もう一つは本山が高森さんの僧籍を剥奪したということです。なぜ剥奪したかというと、これは高森さん自身が教義的に危ういことをいっぱい言っていたからですね。これは皆さん、それを諫（いさ）める人も結構いたんです。いたんだけれども、わかるでしょう。先ほど住職さんにいろいろ僕が聞いた話をしたんだけれども、「高森さんが来たら百人ぐらいの人で本堂が満杯になる。ところが高森さんを異安心だと言っている人がここに来ても十人ぐらいしかお参りに来なかった」と言うんです。そうなったらもう、天狗になって、お前はおかしいと言われても素直に聞けないでしょうね。

龍谷大学の在学中には高森さんの友達、いわば学友という人がいたわけで、龍谷大学の先生とか、それから「華光会（けこうかい）」という団体の代表を務めていた増井悟朗（ますいごろう）さんとか、他にも仙台や奈良に高森さんと仲が良かった人が住職さんとしておられました。どうもそれらの人が、高森さんを諫めたらしいんですけれども言うことを聞かなかったそうです。いずれにせよ、高森さんは本願寺派の僧侶ではなくなってしまったわけです。最近だったら、小池龍之介（こいけりゅうのすけ）という有名なお坊さんが僧籍を抹消されました。あとは藤本晃（ふじもとあきら）さんなんかも本願寺派から出て行かざるをえなくなりました。どちらも本願寺派の僧侶として浄土真宗の教義から大きく逸脱する教えを説いた、という理由ですね。本願寺派は安心論題（あんじんろんだい）

という非常にきっちりとした教学の枠組みがあって、そこからあまりにも外れる人というのは、僧侶としては活動できないということのようです。

大谷派は違いますね。大谷派はそういうのを結構許すような風土があります。昔はそうではなかったかもしれません。暁烏敏（あけがらすはや）などは異安心と言われていますので、時代によってはそうではなかったかもしれませんけれども。だから、これは「もしも」の話なんですが、高森さんが、もし大谷派のお寺に生まれた僧侶だったらどうであったか。「かなり変わったことを言う布教使やなあ」ということで終わったと思うんです。多分あんな教団なんか立ち上げずに、変わったやつだということで、そこそこ人気のある布教使で終わったと思います。ひょっとしたら修練道場の道場長くらいはしていたかも。それぐらいの変な人は大谷派にいっぱいいますから。と言うと、皆さんやはりこうやって頷いている。それが、僕等のいいところでもあり、何かてんでバラバラなところもあり、どっちがいいのかよくわかりませんね。とにかく高森さんは一九七〇年に僧籍を失います。

■急成長する親鸞会

親鸞会が急激に大きくなっていったのはここからです。親鸞会は大して大きな団体ではなかったし、本願寺派と明確に敵対していたわけでもない。高森さんもいろんなお寺で普通に説教をしていた。僧籍を失った後も、しばらくは大谷派のお寺では高森さんを呼んでいるところもあったみたいです。でも、八〇年代ぐらいになったらもう呼ばれなくなってきます。高森さんは独立した宗教団体の教祖という性質が強くなっていくんです。

一九八四年には親鸞会と本願寺派との教義論争がありました。これは中身を話す時間はありませんけれども、ここで重要なのは、本願寺派の勧学寮（かんがくりょう）が親鸞会を批判したのがこの論争の始まりだったということです。あそこで『伝道院紀要』というのを出していて、その中で親鸞会の教義批判をしたんです。それが高森さんの目に留まって、親鸞会は反論文を出します。それについての反論文がまた出ます。何回かやり取りをした後に、本願寺派は親鸞会に返答するのをやめてしまうんです。それで親鸞会は、千四百人で西本願寺の御影堂に座り込みをして「回答を求む」とやります。

ところがそこまでしても本願寺派からは回答が出ませんでした。となるとどうしたかというと、親鸞会は、「私たちは本願寺に勝った」と言い始めるんです。今に至るまで親鸞会はずっと本願寺派に私たちは勝ったと言い続けています。そのやり取りを読むと、親鸞会が勝ったとはとても言えないというのはわかります。わかるんだけれども、はっきり言ってしまえば、喧嘩を仕掛けたものが途中で降りてしまったら、勝ったと言われても仕方がないです。それで、親鸞会はここからさらに成長していくんです。

ここから、東西本願寺に飽き足らなかった人が親鸞会に次々と入っていくんです。この辺りの親鸞会に入った人は、寺院子弟が比較的多いんです。私の上司でも寺院子弟だった人がいます。恐ろしい人でした。睡眠時間がメチャクチャ短いんです。二時に寝て五時くらいに起きるんです。一緒に暮らしていたので私の睡眠時間もそのぐらいになってしまったんですけれども、その人が、ある時僕にお寺の話をしてくれたんです。「瓜生君、寺ってのは本当に腐ってるぞ。どんぐらい腐ってるか教えてやろうか」「ぜひ聞きとうございます」「あのな、寺で報恩講とか永代経とかしてお説教あるだろ。その時お経を読む法中っというのがいっぱい来とるんや。そのお経読みに来た法中とかな、経は読んでな、法話が始まったら帰っていくんやで」「ええー、何しに来とるんですか」「ほんま、そんなんあるんやで。信じられんやろ」「信じられません。まさかそんなことないでしょう」。でも、僕が大谷派の住職になったら実際そうでした。びっくりしましたね。

この時に、既成の教団に飽き足らない人とい

うのは次々と親鸞会に入っていったんです。今もそういう気配はあります。だから、お寺出身だったという人は結構多かったです。これは私の上司だけではなくて、私の後輩でも大谷派のお寺出身という人がいました。この間、その人の親御さんである住職さんから相談を受けてすごく複雑な気持ちになりました。「あの、今どうしてるか知りませんか」と言われて、「僕の後輩でした」と言ったら「ええー」と。

■なぜ親鸞会は大きくなれたのか

二番手を演出する戦略

親鸞会の戦略は、これはある程度のお歳の方なら覚えてくださっていると思いますが、ホリエモン（堀江貴文）のライブドアという会社がありましたでしょう。ライブドアはグーグルとかヤフーがやっているサービスと同じことを全部自分のところでやったんです。それでみんな「グーグル・ヤフー・ライブドア」となったでしょう。グーグルとかヤフーに比べたら、ライブドアは企業としては比べ物にならないくらい小さかった。でも、そういうところと互角に戦っているイメージを持たせることで急激に成長していくんです。親鸞会は、そういう戦略を取ったんです。いまだに、本願寺派や大谷派と私たちはライバルであるという演出をずっとし続けています。そのことで東西本願寺に飽き足らない人を惹きつけていくんです。

さて、親鸞会には射水市に本部会館がありますが、皆さんご覧になったことありますか。ぜひ一度行ってみてください。高速道路の近くに大きい看板がありまして、この前、僕も久しぶりに行ってきました。知った人に会わないか、ビクビクしながら行きましたけれども、やはり大きいですね。中心は正本堂という建物ですけれども、親鸞会はどうも創価学会を意識しているんでしょう。日蓮正宗との確執で取り壊されましたけれども、創価学会でも正本堂というのがありました。親鸞会は正本堂ではなくて正本堂です。漢字は一緒ですね。あとは婦人部とか青年部とかの組織も創価学会を真似ているように見えます。だから高森さんは創価学会に対して一定の評価をしていたんだと思います。

その親鸞会の正本堂なんですけれども、ちょうど僕が親鸞会をやめる年にできました。一番

前から一番後ろまで、百メートル。すごいですね。百メートル走をお御堂の中でできるわけです。大体一万人が正座で座れます。畳敷きの建物としては当時世界最大だという話でした。それで、百メートル先でしたら黒板に何が書いてあるか全然わかりませんから、ハイビジョンで中継されていました。お御堂の一番前のステージの上のところに、畳二十四畳分のＬＥＤディスプレイがありまして、これも、できた時は屋内型としては世界最大という触れ込みでした。実はこのディスプレイに映すカメラを操作していたのが僕だったんです。親鸞会をやめた当時、僕は、「彼は居眠りばっかりして全然聴聞してなかったからやめたんだ」と非難されましたけれども、僕はカメラを動かしていましたから絶対寝られなかったんです。でも、そう言われ続けました。

■親鸞会の本はなぜ売れるのか

次は親鸞会の出している本のことですけれども、本屋さんの結構目立つところに今も山積みになって置いて、１万年堂出版というのが事実上親鸞会の出版社になっています。有名なところでは『子育てハッピーアドバイス』という本は親鸞会の本です。明橋大二（あけはしだいじ）さんという方が著者ですが、子育て本で空前のベストセラーと言われて、どうもシリーズで四百万部出たそうです。こういうのを、どうやって親鸞会は売っていったかということなんです。よく皆さんが思いますのは「どうせ信者に一人十冊とか二十冊とか買わせたんだろう」と思うでしょう。でも、親鸞会の信者はそんなに多くなくて一万人に満たないんです。一人十冊買ったとしても十万部しか売れません。大したことないんです。私も十冊なんて買ったことはありません。

では、どうしたかというと、最初のうちは確かに組織的な購買活動をやったんです。しかしそれは一時的なことで、ずっとやってきたわけでもありません。では、なぜ親鸞会の本はここまで売られるようになったかというと、まず一つは『子育てハッピーアドバイス』の影響が非常に大きい。これは内容もいいしタイムリーな本だったのでムチャクチャ売れました。そして、これのヒットによって営業マンがいろんな本屋さんに出入りできるようになって、そこで親鸞会の高森さんの本とかが置けるようになったんです。

僕も１万年堂出版の営業の仕事をしていたことがあります。日本全国に親鸞会の会員とか講師がいますから、そういう人に１万年堂出版の名刺を配って、営業をやらせたんです。もう全国津々浦々どんな田舎の本屋でも全部行きました。僕が担当していたのは宮城県と福島県だったんですけれども、そんな田舎の本屋さんに、わざわざ出版社の営業が来るなんて、そうそうありません。そうやって行って、配本がありましたならば、「こういうところに置いて、ここのところにこんなポップ広告を入れて、こういう台なんかも作りましたから、こんなふうにして置いてください。こういうふうにやったら売り上げが伸びました」とか、ポップとか展示台とかを持っていって提案をずっとするんです。そうすると、向こうも面白がっていろいろやってくれるんです。そういう地方への地味な営業によって平積みで置かれるようになったり、そこから火がついて次第に売れていくようになったんです。だから、なぜ親鸞会の本はあんなに売れているんだと言われたら、一番は地道に営業したからなんです。

これは、非常に悔しいことなんですけれども、街にある普通の本屋さんに行って浄土真宗の本というと、もう東本願寺出版とか、本願寺出版社の本なんかはほとんど置いてないわけです。そうでしょう。では、何が置いてあるかというと親鸞会の本と釈徹宗さんの本と、それから大谷派だったら川村妙慶（かわむらみょうけい）さんの本ぐらいでしょう。それもバリバリ真宗という感じではないではないですか。どストレートに親鸞の教えを書いている本は、親鸞会の本ばかりです。だから、僕等が本をどんどんこういうところに置いていかなければならないと思うんです。予算からして

も、人員からしても、本願寺出版社とか東本願寺出版の方が、親鸞会の出版部よりもはるかに強力です。親鸞会は貧乏な団体です。

■少ない予算で教団を維持する方法

私がいたころの親鸞会の年間の予算規模は十五億円くらいです。大谷派はいくらあるかというと、包括法人の予算だけで百億円近いでしょう。別院とか教務所とかいろんなところとか、全部含めたら二百億円は超えるでしょう。親鸞会はそれと比較して十分の一以下です。東西本願寺と比較したら二、三十分の一ぐらいしかないんです。それであちこちに広告出したりとかできるのはなぜか。それは多くのことを自分たちでやっているからでしょう。出版社も自分たちで立ち上げましたし、編集や校正も教団の人材でしようとします。広告宣伝の企画も自分たちでしています。大教団は広告代理店に企画から依頼しますし、どうしても高コスト体質になります。

ある伝統仏教教団のＷＥＢサイトは、作るのに三千万円かかっているという話です。でも三千万円で受注した会社が下請けに発注して、その下請けに発注して、さらにその下請けがいくらぐらいもらっているかというと、おそらく数百万円ももらっていない。どうも話を聞いたら、十五分ぐらいの作業に四十五万円も払っていたりする。それを内部でチェックできるような人材もいないわけです。

これに対して、親鸞会は中でほぼ全部人材を育成して、ＷＥＢサイトを作れたりとか、映画を作れたりとか、動画を作れたりとか、デザインしたり編集したりとか、そういうのを自前で育て上げています。これは、親鸞会が特別なのではないんです。新宗教の多くはそうなんです。「崇教真光（すうきょうまひかり）」がありますでしょう。手かざしの教団です。最近その職員をしていた人が教団をおやめになって、私のところにカウンセリングの相談にみえました。彼も出版部門の中にいたらしくて、いろんな話を聞いたんです。そしたらやはり崇教真光でも、そういう人材を最初から物すごく丁寧に育成しているんです。そして、そういう仕事をできる人が育ってくるんです。こういう人材育成を概して新宗教は教団の生命線だと認識しているように思います。逆に伝統教団はあまり重要視していないように見えますね。

だから、何で親鸞会は少ない予

全国に建てられる会館

算でこれだけできるんですかというと、多くは自前でやっているというのがまず一つ。そしてもう一つは、布教教化に教団予算の大部分をつぎ込んでいるからです。僕は最近、親鸞会と本願寺教団のことを思うと太平洋戦争の日本とアメリカを想起するんです。日本は開戦時は結構善戦していたんです。ところが、国家予算の二百八十倍ものお金を軍事予算に使って、それでもう人命軽視のギリギリまで装甲を削ぎ落としたような戦闘機とか作って、戦っていったんだけれども、結局国力に数十倍の差がありましたから、だんだん負けていって、最後は惨敗していったわけです。ちょうど親鸞会はそんな感じです。持てる力の全てを本願寺教団との戦いに費やしたわけです。「宣伝宣伝宣伝、布教布教布教」と。それで、現場に立っていろんな活動したりとかする人は最低限の給料しか出ません。私もやっていましたけれども、一年三百六十五日で僕等が休めるのは正月しかありませんでした。これ以外はずっと働いていたんです。二十四時間。休みなく安い給料で身体を酷使して、そして持てる力の全てを布教に費やしていたわけです。親鸞会が、お金を持っているように見えるのはなぜかというと、こういうことをしているからです。

　そういうことをしているからお金を持っているように見える。でも、実態はどうかというと、もうギリギリです。年間予算十五億円は、言ってしまえば、大谷派で言ったら大きい別院より少ないんではないかと思います。わからないけれども、それぐらいしか実は親鸞会は力を持っていません。それぐらいのお金しか出せないところということです。

　それで、全国に会館が建てられていっていますでしょう。この近くにもいろいろ会館ができていると思うんです。ここから近いところで言うと、例えば小矢部会館は一見立派に見えますけれども、実は潰れた建築会社の建物を競売で買い取ったものです。二千万円か三千万円ぐらいしかかかっていないのではないでしょうか。リフォームも親鸞会はほぼ自前でやっています。それでバババっとやって畳敷いてプロジェクター付けて黒板付けてお御堂一丁上がりなんです。広島会館なんて、これも潰れた会社の建物を買い取ったものです。中の間仕切りを取っ払ってリフォームをしてそれで完成。一般に別院とかお寺を建てたりするよりもはるかに安く作っているんです。ですから、こんなにバンバン建てて親鸞会は超お金持ちだと思うかもしれないけれども、実はそうではない。かなりギリギリです。だから、親鸞会の会館とかお御堂とかで豪華絢爛にできていたりとか、そんなところは見たことないでしょう。

　親鸞会の本部会館なんて、さすがにあれだけの会館を建てるのには相当お金がかかったと思うでしょうが、実は百二十億円なんです。そのお金を集めるのに全部で九年間かかっています。九年間毎年のようにみんなで集まって、会長給与二十パーセントカット、本部長給与十五パーセントカットと、ずっと給与カット給与カットと。それで、これだけ貯まって、この中から資産運用して国債をこれだけ買って、現在目標達成率何パーセントですというのを九年間やったんです。本願寺派なんて、ご門主さんが交代するというので二百億円を集めたんでしょう。どっちが強力かというと、それはもう比べ物にならないでしょう。親鸞会は言うなればそれぐらいの教団なんです。これは、もう背伸びして背伸びして背伸びしてやっているところです。だから教勢が非常に強まっているように見えるかもしれないけれども、実態は火の車だということです。

■とても敵わない本願寺教団

　七百五十回忌は親鸞会でもやりました。延べ二万二千人。これが今の親鸞会の実力です。三日間やったわけですから、三日間全部参詣した人は三人と数えられているわけです。これが親鸞会の精一杯の動員力です。親鸞会の新聞に載っている写真を見てもわかりますけれども、ズラーッと並んでいます。こうズラーッと並んでいる写

750回忌（予想参詣者数延べ22,000人）

真を撮るのが親鸞会は大好きです。こういう写真を撮って、『顕正新聞』という機関誌に見開きで載せるんです。「どうだ、こんなに集まったぞ」と見せるわけです。

でもたくさんの人が集まっている写真を撮ると、高森さんの話を聞いて居眠りしている人が写るんです。それで、高森さんの話を聞いて眠っている人が一人でもあってはならんということで、起きている人の目をフォトショップというパソコンのソフトで移植をして、全員の目を開けるという作業をしているのを見たことがあります。北朝鮮みたいでしょう。将軍様が演説している時に寝ている人がいたらまずいよね。でも、引っぱたいて起きろと言うわけにもいかないから、起きていることにするしかないです。

北朝鮮は、自分の将軍様を批判したりとかそういうことは絶対許されないでしょう。なぜ許されないかというと、北朝鮮という国が弱い国だからです。強い国だったらそんなことをする必要はないです。アメリカなんて見てください。大統領を批判し放題ではないですか。日本だってそうでしょう。最近はちょっときな臭いことになってきましたけれども、基本的には安倍首相を批判しても私の手が後ろに回ることはないわけです。このように北朝鮮よりも日本の方がはるかに言論の自由度が高い。なぜかというと、日本の方がずっと国としての力を持っているからだと僕は思います。

では、親鸞会はどうかと言ったら、トイレットペーパー一枚ぐらいのところでもっているようなものです。高森さんを批判したりとか、高森さんの権威が失われたらビリッと破れてもう終わりです。大谷派はそうではないでしょう。宗務総長が駄目な人だったとしても問題ないです。どこかの教区の坊さんが捕まったとか、こんなニュースが流れても我々の教団は、びくともしないとは言わないけれども、それで致命的なダメージを受けるということはないわけです。

僕等は教団の批判を自由にできます。教団の批判が自由にできるということは、大谷派がそれだけ底の深いものを持っているということなんです。対して、ギリギリのところでやっているのが親鸞会です。決して強いところではないです。大げさにやって虚勢を張っているのは弱いからです。自分たちの持てる力を全部使い果たして東西本願寺との戦いに明け暮れた教団で

す。でも、東西本願寺は少しも揺るがなかったでしょう。本当に少しも揺るがなかった。

本願寺派に伝道院というのがあるんです。布教使を育てるための学校で百日間学ぶんです。大谷派では伝道院みたいなところがないので、ちょっとわからないかもしれませんが、法話特化型の大谷専修学院のようなものだと思ってください。伝道院に来るのは、僧侶になりたいとか教師資格を取りたいとかではなくて、もうそういうのはとっくに取った上で、布教使としての資格を取りたい人が来るわけです。そこで私も五年間ぐらい続けて講義をしています。

それで、講義の中で質問のコーナーがあるわけです。そうしたら、この前、すごい質問が出てきまして、「先生、私はなぜ宗教が必要なのかわかりません。宗教は必要だと思われますか」と聞かれたんです。それがわからないのになんでここに来たのかよ、と思いました。教えを伝えるために布教使になりたいんでしょう。そのために百日間の期間を空けて、仕事がある人だったら仕事をやめて、お寺のこともやらなければならないのを休んで、お金も出して来るわけでしょう。それで「宗教が必要かどうかわかりません」なんて、結構愕然としたんです。

僕は十二年間、本願寺打倒と言って親鸞会で物すごい真剣にやったんです。でもその時に、過去に私たちが立ち向かっていった本願寺教団には、とても敵うわけがなかったんだと思ったんです。親鸞会はこんな教団を相手にしていたのかと。わかりますか、この気持ち。

親鸞会では講師（布教使）になるために顕真学院という物すごく過酷な学校に入ります。もうその厳しさたるや、今思い出しても、胸のあたりにゾクッと来るぐらい恐ろしいところなんです。本当に大変だった。厳しさに耐えられなくて、私の同期の少なくない人たちが心の病で脱落していきました。僕と同期で入ったのは二十一人いましたけれども、講師になれたのは十人ちょっとです。後は全部途中で諦めて断念するか、心を病んでやめていきました。それぐらい厳しいところです。「宗教は必要ですか」なんて、そんな質問は絶対に言えません。許されないです、そんなことは。

高森顕徹の手足となって、真実開顕のロボットになって、この命を親鸞会に全部捧げますという、そういう決意が前提です。「なぜ宗教は必要なんですか」などと迷っている余裕なんてありません。なぜかというと、親鸞会はそういう人しか育てることができないからです。

これは、専修学院とは違いますでしょう。本願寺派の伝道院もそうでしょう。本願寺派は「なぜ宗教は必要なんですか」と言う人を一人前の布教使に育てる力を持っているんです。すごいことです。とても敵わない教団と僕等は戦っていたんだ、とその時に知らされました。このショックを誰に話しても、なかなかわかってもらえないんです。でも元親鸞会の講師だった人に、こんなことがあったんですと話をすることがあって、「俺たちはホント敵わないところに戦い挑んでたなあ」と言ったら、「いやあ、それは敵わんわ。俺たちはもう完璧に負けていたんだ」と言われました。でも、東西本願寺関連の研修会でこの話をしてもみんなポカンとしているんです。それがどうしたのという感じ。この感覚の違いはわからないでしょう。例えば、戦時中の日本でハチマキ締めて、「撃ちてしやまん」「欲しがりません、勝つまでは」みたいな感じにやっていた人たちが、アメリカで高層ビルがバンバン建っている中で踊ってハンバーガーとか食べている様子を見た時のショック、と言ったらわかってもらえますでしょうか。

親鸞会はそういうところなんです。親鸞会では自分の人生すべてをこの布教のために捧げる、という人間でなければ親鸞会の講師にはなれなかったんです。私は趣味も何もありません。いまだにないです。酒も飲まないしタバコも吸わない。旅行にも行かないし遊び方も何も知らないです。なぜかというと、布教しかやってこなかったから。そういう人間でなかったら、親鸞会の中でリーダーになることはできなかったんです。そういうところだったんです。そういう

人しか育成することができなかったんです。

■親鸞会の布教活動のやり方
本願寺教団の布教活動のやり方

さて、今の親鸞会はどういう布教活動をしているかということなんですけれども、今の親鸞会のメインはフェイスブックですね。ＳＮＳというのをご存じですか。ソーシャルネットワーキングサービスと言いまして、インターネットで友達になっていくんです。それで、こういうサービスを使って人をガンガン集めて布教しています。みんなインターネットで検索して調べる時代です。何かわからないことがあったら、取りあえずインターネットの検索サイトにボンと入れてみるんです。

それで、富山大学の先生が本願寺派の本山に行って法名をいただかれた。本願寺派で法名を頂かれると、法名のご由来みたいな紙が付いているんです。それで、浄土真宗の教えはいいなとその先生は思われて、その中に入っている仏教語をいろいろキーワード検索してみたそうです。そしたら、出てきたのは親鸞会のサイトばかりだったというんです。その先生は、僕に言いました。「真面目に浄土真宗の教え学びたいって人は、今は親鸞会に行ってるんじゃないですか」「なぜですか」「インターネットで検索したら親鸞会のサイトばっかり出てくる。これ、東西本願寺はどう思ってるんですか」「何も対策してないと思います」「何も対策してないって、これ、まずいじゃないですか。今普通に浄土真宗の教えを知ろうと思ったら、一番最初に出会うのは親鸞会ですよ」。こうはっきり言われました。そうですよね。

だって、本屋さんに行って浄土真宗の本を買おうと思ったら、川村妙慶さんと釈徹宗さんと親鸞会の本しかないわけでしょう。インターネットで、何か浄土真宗のことを調べようと思ったら、親鸞会ばかりが出てくるわけでしょう。お寺にご縁のない人は、親鸞聖人の教えを知りたいと思ったら、自然に親鸞会に当たってしまうんです。

それで、何とかしようと思って、実は大谷派でもそういう対策が練られたんです。その結果できたのが「浄土真宗ドットインフォ」というサイトなんです。大谷派では、いろんな教区で、いろんな教えの文書をいっぱい出しているではないですか。高岡教区にもあると思うんです。でも、高岡教区で作ったものは、高岡教区の人しか読まないわけです。それを読みたいと思っても、読む手段が何もないわけです。最初はそういうのを全部インターネットに載せて、親鸞会を圧倒するものを作りましょうという話だったんです。現在は当初想定したのとは違い、どちらかというと寺院向けのサイトとして頑張って情報を発信していますが。

親鸞会にはＹｏｕＴｕｂｅのチャンネルもあります。そこにはアニメとか、きれいな女性が真宗の教えを解説している動画があります。実は大谷派にもＹｏｕＴｕｂｅのチャンネルがあります。見てみたら公開講座の動画が多く、法話にしても本多弘之（ほんだひろゆき）先生や池田勇諦（いけだゆうたい）先生が御影堂でお話しているのとか、重鎮の法話ばかりです。いいものだと思いますが、初めて法話を見る人向きのものとは言えないと思います。どちらかというと親鸞会の動画は、初めて法話を聞く人でも見ていけるような内容になっています。

親鸞会にはバス型の移動映画館というのがあります。つまりは動く道場です。東日本大震災がきっかけでできました。震災で、大谷派や本願寺派も震災の支援にいっぱい行きました。しかし、震災の支援に行ってそこで布教するということは、遠慮しましたでしょう。でも、親鸞会や顕正会は、被災地で思いっきり布教したわけです。考えたら、そういう大きな衝撃に遭った方は、仏法を求めている人でもあると思うんです。だから、そこのところへガンガン親鸞会や顕正会は入って、遠慮なく思う存分布教したわけです。そして、現地で仏法を聞きたいという人がいっぱい出てきた。この当時の親鸞会の新聞とか見ましたら、「被災地で結んだご縁」とかそんな特集記事が多いです。

ただ、そういう方がお話を聞こうにも被災地の市民会館や公民館なんかの多くは避難所になっているし、津波で流されたりして、お話を聞く場所がない。そこで、トラックに道場を乗せて移動道場を作ったわけです。こういうバスを十五台作って日本全国を走らせたんです。皆さんも一度入ってみられたらいいと思います。これはいろんなところをガンガン走っています。でも、中がいっぱいになっているのはあまりないと言われます。せいぜい二、三人ぐらい、多くて十人ぐらいです。あまり成功しているとは言い難い。ただ、被災地ではかなりうまくいったらしいです。

カルチャーセンターの仏教講師にも積極的に進出しています。北日本新聞カルチャーパーク高岡、「親鸞聖人正信偈入門」。講師は日本仏教アソシエーションの長南瑞生（おさなみずき）さん。親鸞聖人の正信偈をわかりやすく解説するとあります。この長南瑞生という人は親鸞会の講師です。過去にはＮＨＫ文化センターの仏教講師に親鸞会の人が入っていたこともありました。カルチャーセンター以外にも、大学のエクステンションセンターに親鸞会の講師が入っていたこともあります。大谷大学でも生涯学習講座をやっていますでしょう。そういうところに親鸞会の講師が入って『歎異抄』の話などをしているんです。

これは大問題だと思って、僕はあちこちに電話したり連絡したりして、どうしてこうなったんだということを聞いたんですけれども、親鸞会よりむしろこちらに原因があるように思えました。その大学のエクステンションセンターの人が言うには、東西本願寺の人をいろいろ探してお願いしたけれども、みんな断られましたと言うんです。これは深刻ですよね。それで、インターネットでいろいろ調べて、この先生にお願いしましたと言うんです。つまりは東西本願寺の有名な先生といっても、その教団の外へほとんど出ていけないという実態があるのです。

本願寺派の布教使養成の場で講義する時に、よく「池田勇諦先生って知ってる人」と毎年聞くんですけれども、一人も手が挙がりません。これから布教使を目指して一生懸命頑張ろうという人が、現在の大谷派で最も有名な講師の一人を知らないんです。「本多弘之先生って知ってますか」と聞いても、当然知らないという感じです。でも、我々だってそうでしょう。森田（もりた）眞円（しんねん）先生を知っていますか。本願寺派の勧学です。深川宣暢（ふかがわのぶひろ）という人を知ってますか。知らないですよね。それで、浄土真宗の大きな二つの流れである、大谷派・本願寺派の中でもお互い全然知らないんです。

大谷派にはきら星のようにいい先生がいっぱいいるわけだけれども、ほとんど教団の外に知られていないんです。その理由は自分たちの教団で使い果たしてしまっているからです。大学の講義が月曜日から金曜日まであって、土曜日、日曜日はどこそこの同朋大会とか○○大会とか、組の○○記念事業とかすごい引っ張り回されて、外に向かって出ていく余裕がないわけでしょう。むしろ東西本願寺くらい大きな教団になると、その必要性も感じないのかもしれません。

とある仏教誌の編集長さんと親しくなっていろいろ話したことがあります。そこで浄土真宗の記事を書く人は、龍谷大学とか大谷大学の人はあまりいないんです。大谷派なら九州大谷短期大学とか、本願寺派なら相愛大学の先生が書

くんです。それで僕はずっと疑問に思っていて、なぜですかと聞くと、大谷大学とか龍谷大学の先生は、依頼しても引き受けてくれないと言われるのです。だから、そうではないところにお願いするしかないと言うんです。

私たちの教団は比較的規模が大きいわけです。大きいと教団内だけで足りてしまうものだから、外に出ていかないんです。結果どうなるかと言ったならば、もう仲間内の閉じた教団になってしまっていますよね。だから、こういうカルチャーセンターに親鸞会の講師がバンバン入ってくるのは、私たちが外に出ようとしていないからです。

■カルトの問題は表面だけ見ていてもわからない

では、結局親鸞会は、そんなに問題のない教団なんですかと聞かれれば、当然あるんです。例えば、全財産の贈与とか、それから脱会したら一千万円払えとか、こんなことは山盛りにあります。ただ、先ほども言ったように、それはタマゴの黄身の話であって、ほとんどの人には関係ない。でも、そのタマゴの黄身に入っていく可能性があるから、やはり止めなければならない。そういう人というのは、一部ではあるけれども、この教団が私の命であって、この教団がなければ私は生きていけないという人からは、容赦なく搾り取っていきます。

そうではない人には非常に優しいんです。入り口はあったかいんです。中に行けば行くほどヤバくなっていきます。これはもうどんなところでもそうです。入り口だけサッと触れて去っていく人がやはり一番多い。でも、そこから中に入っていったならば、情け容赦なくその人の人生を奪っていく。本当にここは危ないなという教団に入った人でも、表面だけ見て出た人はやはりわからないでしょう。「別にそんな危ないところでもなかったですよ」。そういうふうに言う人がやはりいるわけです。オウム真理教とかアレフなんかもそうです。

■伝統教団内に入り込む親鸞会親鸞会に対して私たちのなすべきことは

今、伝統教団の間で起きていることで、北陸のある県での大谷派の事例があります。これは親鸞会の講師が、なんと推進員の研修会の講師に招かれたということがあったんです。なぜこんなことが起きたのかというと、北陸は浄土真宗が盛んな地です。ところが、過疎化に苦しんでいまして、さらにお寺の数も多いものですから、法務だけで経済的に成り立つお寺は多くないです。そうすると、そこでは今も在家のお講が残っていますが、地域の住職さんはとてもそこまで見れる余裕がない。ある時、親鸞会のチラシがその家に入っていて、ちょっと聞きに行ってみようかと思って行ったわけです。

行ったら若い先生が一生懸命話している。それで、「これはなかなかいいな。俺たちのお講に呼ぼう」という話になって、お講に親鸞会の講師が来るようになった。それで、親鸞会の講師は一生懸命に話をするんです。それで、「ああ、いいお話聞いた」と思われたそうです。その後、その親鸞会の講師が、どうも、そこのお講に来ていた人全員に礼状を書いていたらしいんです。その礼状を僕も見せてもらいました。全部手書きで丁寧に書いている。五、六人の人がお参りになっていたら五、六人の人全員に書いている。

それで、「すごい。この先生はなかなかいけるな。今度の推進員の研修会があるけども、この先生を呼ぼうや」という話になって、組長さんのところへ行ったんです。組長さんは、ご門徒さんからこの先生を呼びたいと言われることなんて今まであんまりなかったので、「よう言うてくれた。この先生は誰か」「今お講に来てもらってる先生です」「わしは連絡先とか知らんけど、あんたらわかっとるんか」「私たちが連絡しますから大丈夫です」「じゃあ、よろしく頼む」と言って任せてしまったんです。それで、その先生の推進員の研修会の書類を作って組の人に配ったんです。そうしたら、住職さん

の一人が、この先生は一体誰だと思って教務所に問い合わせたんです。

教務所に問い合わせたら教務所でも知らないんです。それで、ひょっとしてひょっとしたら親鸞会かもということで、私に電話がかかってきて、「瓜生さん、○○さんという人を知ってますか」「知ってますよ。私の同期で早稲田大学出身で親鸞会の講師で現役です」。そしたら、電話の向こうで凍りついているのがわかるんです。「瓜生さん大変です。○○組の推進員研修の講師にこの人が決まってます」「何でそんなことになってるんですか」と始まって、すぐに現地に行ってヒヤリングしていろいろ回っていくうちに、こういう実態が明らかになっていったんです。今、仏法が深く身に付いている土地で、お寺が勢いを失ってきているところがありますでしょう。そういうところに親鸞会が入り込んでいるんです。

それで、その手の問題の非常に大きなものとして、観勢寺（かんせいじ）の問題があるんです。これは富山県の上市町にある本願寺派のお寺なんですけれども、元々ご門徒さんのいないお寺だった。私はよくわかりませんが、富山はそういうお寺がよくあるらしいですね。それで、いろんなお寺のご門徒さんをお参りさせてもらう形で、このお寺は存続していたんです。

ところが時代が変わって、こうしたお寺の仕事が失われていくわけです。それで、前の住職さんは、それでもサラリーマンをしながら、自分の退職金等をつぎ込んで本堂の改修をしてお寺を維持していたんです。その住職さんが亡くなって次の住職さんは女性だったんですけれども、その人が住職になって、しばらくは頑張ってお寺を支えていたらしいんですけれども、もうとても支えられないとなったんです。それで、いろんな人に相談して、組長さんに相談して、教務所に相談して、いろいろやったんだけれども、結局は誰も何もしてくれなかったと言うんです。

それで、このお寺の維持管理はできないし、お寺を更地にして宗教法人を解散させるだけのお金もないと。「どうしたら、どうしたら」というふうになっている時に、その人は親鸞会の存在を知るんです。それで、親鸞会の人に相談して、「今お寺がこんな感じで、こういうことになってるんです。だから親鸞会に預かってもらえませんでしょうか」と言ったら親鸞会は、それでは預かりますということになって、そして、このお寺は親鸞会に譲渡されることになったんです。

そうしたら、まあ大騒ぎです。教務所とか、組長さんなんかももうみんな大騒ぎになりまして、親鸞会に譲渡することだけはやめてくれという話になったんです。でも、この住職さんは、「今まで私が困ってた時に何もしてくれなかったのに、親鸞会に渡すとなった瞬間にこうなった。予想通りだ」と言ったらしいです。私は教務所も組長さんも何もしなかったわけではないと思う。一番の問題は伝統教団という組織自体がこうした事案に対してできることが、あまりに少ないという制度設計上の問題と言えます。だからといって、記念事業で数百億円のお金を集められる教団が、つぶれかけたたった一つの寺を救うこともできないのかと言われたら、言葉もないでしょう。

譲渡が決まってからも、いろんな人がいろんな努力をしたんです。この事件が起きた時に住民の説明会もあり、僕も行っているんです。それで、関係者にいろいろ話を聞いたりとかしたんだけれども、結局は東西本願寺という大教団はこの小さな寺を救うことはできなかった。それをしたのはずっと小さな新宗教である親鸞会だった、ということです。このお寺は今親鸞会のお寺になりました。中はきれいに改装されまして、大きな看板が立って、毎週二回法話が行なわれています。今や観勢寺は親鸞会の布教の一大拠点です。彼らは「寺に法話を聞きに来ないか」と言って門徒さんを勧誘しています。実に頭の痛い問題ですが、彼らは嘘をついているわけではありません。「親鸞会の寺だ」ということを言ってないだけです。

ただ、我々にとって救いなのは、石川正穂（いしかわまさほ）さんという、この近くにある大谷派の玉永寺（ぎょくえいじ）の住職さんが、このお寺の近くにある電気屋さんの一室を借りて、毎月そこで聞法会を開いていることです。この周辺の人たちに「親鸞会に行くな」ということではなくて、「法座の機会を設けましたので、ここで仏法を聞いてください」ということを、チラシを配って案内して、地道に法座を開き続けています。

こうした研修会を開くと、親鸞会対策とは何ですか、何をしたらいいですか、と、みんな聞くでしょう。我々は親鸞会とどういうふうに向き合ったらいいのか。そんなの、答えは一つしかないんです。私がいま仏法を聞くこと。仏法を伝えること。法座を開くこと。これ以外何にもありません。そういうのをこの石川さんという方は、率先してやっています。まさに直球ど真ん中の正攻法です。親鸞会がここでお話するんだったら、私たちもしましょう。これ以上の対策はないではないですか。親鸞会に行って話を聞く人は、別に問題のある宗教団体に入りたいと思っていたわけではありません。ただ仏法を聞きたかっただけなのですから。

では、大谷派はどうなんですかというと、大谷派もあるんです。○○教区のあるお寺なんですけれども、ここのお寺の住職さんは熱心に親鸞会の活動をされていて、親鸞会の弁論大会に出て準優勝しています。さらにその住職さんは自分のお寺に親鸞会の講師を呼んで法話会までしています。僕はこの問題を知って、当時の教務所長さんと話したんです。「これ、どうするつもりですか、何か対策をしたんですか」とかなり強い口調で言いましたら、何もしてないと言うんです。「なぜ何もしないんですか。こんな大事なことが起きてるのに、その住職さんに対して話し合いとかしないんですか。まず、事実を把握して、膝を付き合わせて話をするとかしませんか。僕ができること何でもやりますから」と言ったんだけれども、「そんなことしたら離脱するかもしれないからできない」と言われる。もうびっくりです。これ、ほっておいたら観勢寺の問題と一緒になりますよ。危機感がないにも程があります。

親鸞会ではありえないです。親鸞会で観勢寺のような問題が出てきたら、みんなで必死に支えてバックアップしていきます。キリスト教などでもそうです。貧しい教会を豊かな教会が支える仕組みを彼らは持っています。伝統教団には不思議とそういうのがないのです。社会の貧困を救おうとする活動は熱心ですが、自分たちの仲間が倒れそうな時に支える仕組みを持たない。○○教区のあのお寺も、いずれ親鸞会のお寺になるでしょう。他の教団に行こうとする人の気持ちを聞こうという行動もないのですから。心のどこかで、どうせ八千ヵ寺もあるんだから、一ヵ寺ぐらい親鸞会に行ってもいいやと思っているんではないですか。

私たちの仲間で、同じようにカルト問題に取り組んでいる大谷派の僧侶が、ボソッと呟いたことがありました。「カルトってのは温かい。でも、私たちの教団は冷たい」と。まさにそうだなあと私は思います。ほったらかしなんですから。親鸞会に行こうとしている人がいたら、みんなで一生懸命説得して止めて、そして何か困っていることがあったら、耳を傾けるのが筋

ではないですか。

最後にちょっと興味深い分析を見ていただきます。「どういう大学生がカルトに入らないか」というものです。「悪事をした大学生」「自分のことしか考えない大学生」「理想のない大学生」「明日の生活にも困る貧乏な大学生」「勇気意気地のない大学生」「威張り散らす偉い大学生」「何事にも一生懸命にならない大学生」。こういう人はカルトに入らないというんです。みんなこれ本当にそうだと思います。カルトの問題に取り組んでいる人は、ああそうだと誰しも頷きます。この「カルト」を親鸞会に置き換えてみると、「お寺の行事が増えたら迷惑なご門徒さん」「聞法会が増えたら面倒くさいと思うご門徒さん」「報恩講の準備には来るけども、法座は行きたくなくて休む役員さん」「住職なんてのは、法事と葬式さえしっかりやっていればいいんであって、伝道なんて別にやらなくてもいいと思っているご門徒さん」。こういう人は親鸞会に入りません。

では、どういう人が親鸞会に入るのかというと、「お寺で仏法を聞いているけれども、もっと要（かなめ）のところが聞きたい」「住職さんにいろいろ聞いているんだけれども、なかなかちゃんと答えてくれない」「いろいろ聞法会とかに顔を出しているんだけれども、それを深く聞きたい、もっともっと聞きたい」。そういう人が行くんです。

では、そういう人に我々がどう向き合ったらいいか、答えは一つしかないんです。私たちがそういう方の思いに応える法座等を設けていくということです。一つのお寺でできなかったらみんなで共同してやっていけばいいんです。滋賀県では若手の僧侶が集まって、駅前で「親鸞講座」というのをずっとやっています。間衣（かんえ）（黒い衣）を着て、駅前でチラシを配って、旗を立てて、それで人を呼んでいます。ご門徒さん以外に声をかけて、市民ホールとかを借りて、そこで仏法の話をするということを、ずっと四年間やっています。それで、最初は一つの駅で始めたのですが、今は三つの駅になりました。この活動自体はいろいろな事情があって今は休止中ですが、各地でその理念を引き継いで同じような法座を拡大しています。親鸞会がやっているように私たちもやる。チラシを配ったり、個別訪問なんかもやってもいい。そういうふうにしてお話を聞く人と、お話を聞く機会を増やしていく、これが僕はすごく大事だと思うんです。

■正しさへ依存していくカルト　正しさから迷いへかえす浄土真宗の教え

親鸞会に入っている人は迷っている人だと思いますでしょう。それで、大谷派にいる人は正しい教えを聞いていると。迷いなしが大谷派、迷っているのが親鸞会。これは全く逆ですね。正しいのが親鸞会。迷っているのが大谷派です。そう言ったら、皆さんギロッとこちらを見るではないですか。これはどういうことかというと、皆さんの身の回りに宗教を熱心にやっておられる信者さんがいますか？すごく「正しい」でしょう。

親鸞会もそうなんです。親鸞会に入ったらどうなるかというと、とても「正しく」なるんです。これを私は「正しさへの依存」という言い方をします。正しさを握り締めて、正しさを抱きしめて生きるんです。正しい教えを知りたくて、正しい信心をいただきたくて、正しい生き方が知りたくて、正しさをつかんで、これが正しい生き方、これが正しい教え、これが正しい求道といって、正しさをギュッとつかんで、正しさに依存していくんです。

それで、脱会というのは、迷っている人が目覚めて正しい教えに入っていくのではないんです。脱会というのは、正しくなっている人が迷いにかえっていくことなんてす。迷うことは苦しいんです。苦しいし辛いし、そして不安になっていくんです。でも、浄土真宗の教えは、私たちをちゃんと迷わせてくださる力を持っているんです。だから、信仰を深めて「正しくなってしまった人」が脱会するということは、迷いに

かえっていくんです。

迷っていてもいいんです。人の迷いとか、人の不安とか、そういうものをちゃんと受け止めてくれるのが本当の浄土真宗だと私は思っています。だから、浄土真宗というのは、私をちゃんと迷わせてくれるんです。ですから、皆さんが思っていることは、逆なんです。大谷派は正しい、迷わない。親鸞会の人は迷っている。まったく逆です。親鸞会の人もこちらのことをそう思っています。俺たちは正しくてお前等は間違っていると。そんなところに立って言っても何も歩みよりなんかありません。

私たちはちゃんと迷えるんです。だから、正しいのが親鸞会、迷っているのが大谷派でいいんです。皆さんは、こういう話を聞いてくださるでしょう。大谷派のこういうところが好きなんです。親鸞会は「高森さんの話を聞いているから私は間違いない」。そういうところに依存していくわけでしょう。そこに依存したら高森さんが間違いだとなった時に全部崩れていくんです。僕等は大谷派という教団が全部間違いだったとなっても、最初から迷っているのですから何の問題もない。私はどうやっても迷うことしかできない存在であると目覚ましていただく。それが私を迷わせてくれる教えということではないでしょうか。（了）

【タイトル『我身』について】

「わが身」といいますね、あの「わが身」というものを正しく「わが身」といえるのはですね、やはりこの阿頼耶識ですね。阿頼耶識という――阿頼耶識というものは、このですね体ですね、この身というもの――この身というものをですね、それをちゃんと見ていくものですね、公明正大な心でもってわが身というものを見ていくんですよ。わが身を見ていく、と。わが身というのは、つまり阿頼耶識の世界にあるんでしょう。わが身というものはですね。だから、阿頼耶識というものわからぬものはですね、すぐ――、わが身というとすぐなにか、そこへこう――ね、わが身というと「わが身というのは軽いものだ」そういうて、この――すぐですね、わが身というと私（わたくし）の、すぐに私有物のように考える。わたくしの私有物、わが身というと私有物、と。ところがこの阿頼耶識でわが身というのはこれ、公明正大な存在であります。

（曽我量深『法藏菩薩』より）

編集後記

高岡教区では各部門が年間を通して様々な教化活動を計画実施しています。しかし兼業で他のお仕事に就いておられる方、法務が入り都合がつかなかった方と事情により講義に参加できなかった方々が多いことと思います。今回から始まった教区報『我身』はそのような方々が実際に講義に参加できなくても文章を通して参加していただく、そのような機会が増えるようにという願いのもとに発刊しました。私自身初めて講義を文章にするという作業に携わらせて頂きました。戸惑いとなかなか進まない不安を感じながらもスタッフと共に進め、なんとか完成に至りました。一人でも多くの方に読んで頂きたいと思いつつ、第2号発刊に向けてスタートです。

（教化本部員　梨谷真嗣）

発行者
真宗大谷派高岡教区教化委員会
発行所
真宗大谷派 高岡教務所
〒933-0912 高岡市丸の内2-15
TEL 0766－22－0464
FAX 0766－24－2215
E-mail
takaoka@higashihonganji.or.jp
真宗大谷派（東本願寺）
高岡教区ブログ
https://takaokakyouku.net